

湛然は、『摩訶止観』『法華玄義』『法華文句』いわゆる天台三大部に対して本格的な注釈書を著し、智顛・灌頂以降に衰退した天台宗の教勢を復興させた人物として天台中興の祖と評されている。

智顛・灌頂から湛然までの天台仏教においては、現存する文献資料もなく、また目立った著作活動が行われたとする歴史資料もない。しかし湛然の天台三大部注釈書である『止観輔行伝弘決』『法華玄義釈籤』『法華文句記』はもとより、湛然の門下とされる梁肅、普門、道邃、行滿、元皓、道暹、智度、智雲、明曠、梁肅といった人々には天台三大部や涅槃経、維摩経に関する注釈や著作が現存している。とくに湛然門下における『法華文句』および『法華文句記』に関する研究は、現存する文献の数からして盛んであった。

具体的には、道暹の『法華文句輔正記』、智度の『法華経疏義續』、智雲の『法華文句私志記』と『私志記諸品要義』、道邃の『法華文句疏記義決』といった著作が現存している。このうち、道

湛然とその門下——唐代天台仏教と『法華文句』研究—— 松森秀幸

暹の著作は『輔妙楽記』ともいわれるように師である湛然の学説を助けようとするものであり、批判的態度がほとんどみられない。一方で智度や智雲の著作には湛然の学説に対してしばしば異論が提示される。また道邃には『法華文句』『法華文句記』だけではなく天台三大部すべてに注釈があるが、そのいずれも日本の播磨道邃の著作であるとする説が根強い。

とはいえ、湛然の門下とされる人々の伝記は早くから逸してしまっていることもあり、湛然と彼の門下、また湛然の著作と彼の門下の著作との関係性は、これまで十分に解明されてきたというわけではない。この関係性を明らかにすることは、湛然を中心とした唐代天台仏教復興運動の様子を明らかにするための手がかりになるとともに、天台仏教復興運動の中心的人物としての湛然の新たな側面をも明らかにすることであると思う。

(まつもり ひでゆき／東洋哲学研究所研究員)